

## 飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 473 回 20年で歴史は作られた！～空白の20年を検証する

2012.5.20

日本の歴史を変えた大改革、色々あるが、群雄割拠の戦国時代を治め、長い武家支配の基盤を作った安土桃山時代、その武家支配の終焉を作り近代国家に移行させる基盤を気付いた明治維新、この2つを挙げるに、そう、異論はないだろう。

この2つの大改革がどのくらいの期間で行われたのか、ご存じだろうか？

諸説あるが、安土桃山時代とは、信長が安土城を築いた時から秀吉の死去までとするのが通説とすれば、長くみると30年、短くみるとわずか25年間だ。一方の明治維新、1867年の大政奉還から1877年の西南戦争終結までの一連の改革・事件のことを通説とするが、1889年2月の大日本帝国憲法までを含める場合もある。つまり明治維新はわずか10年、長くても22年間の出来事である。

20年そこそこで日本の歴史は大きく変わっている。

平成になってから、すでに20年以上が経過した。

が、ここ近来、「空白の20年」と言われて久しい時が虚しく過ぎ去っている。

この20年間で、我国の内閣は17回変わっている。

その間総理大臣は14人、短命は羽田孜の64日、最長は小泉純一郎の1,982日(5年4か月)、そして任期1年未満の総理大臣は細川、羽田、麻生、鳩山と4人も存在した。彼らは一体何をやってきただろうか。

例えばGDP、日本のGDP(名目)は、バブル直後の1991年が470兆円、2010年が479兆円。20年を経過しても、経済規模はほとんど変わっていない。期間中の最高額が、1997年の515兆円だから、むしろ後退している。

一人当たり国民所得は1998年の420万円を上限にして、その後の10年間は400万円台にとどまり、2008年には380万円を下回っている。

世界経済に占める日本経済の比率も徐々に減衰しており、日本のGDPが世界のGDPに占める割合は、1994年は17.9%に達していたが、2006年には24年ぶりに10%を下回って9.1%まで下落し、10年前の半分の水準にまで落ち込んだ。

日本の国富(正味財産)は、2007年度は2,794兆円で、20年前の約8割になったといわれている。

1990年「総量規制」発動前、3万9,000円台だった日経株価は、今8,000円台(コラム執筆時点)、凋落の一途を辿っている。

政府の財政も、景気の悪化によって、所得税と法人税が減収となり、国税の1/3が失われ、消費税増税にもかかわらず、トータルの税収が、落ち込んだ。

それ以後、経済は、長いデフレのトンネルに入り、現在に至るまで回復していない。

2010年度の国民負担率は39%。このうち、社会保障負担率は17.5%と過去最高

となる。国民所得に占める税と社会保障負担の割合を示す国民負担率に、国と地方の財政赤字を加えた「潜在的国民負担率」が2010年度は52.3%になる見通しで過去最悪となる。

厚生労働省によれば、2000年代半ばの日本の貧困率は14.9%。メキシコの18.4%、トルコの17.5%、米国の17.1%に次いで4番目に貧困率が高かった。(ちなみに、OECD加盟国の平均値10.6%である)

働く人の数を示す「労働力人口」が、2009年に戦後初めて6割を下回った。比較可能な統計がある1953年以降でこの比率が6割を下回るのは初めて。日本の労働力人口の減少は国際比較でも際立っており、今後の経済成長を押し下げの要因になることが懸念される。非正規雇用者比率は1990年の20.0%から2008年の33.9%へと大きく上昇した。いまや3人に1人以上は非正規雇用者となっている。

この20年、日本はポジティブには、何も変わっていない。

それどころか、知らぬ間に大きく退化してしまった。

この20年は歴史の空白…「空白の20年」とは、そんな意味なのだろう。

この平成の20年という時代は何だったのだろうか。

経済問題から派生する、多くの社会的病魔が生まれた。

20年前には決してありえないと思っていた、またあってはならないと思っていたこと、すなわち、これほどまでの低成長と、これほどまでの賃金抑制が事実として確認されるだけと言っても過言でない。もしこれほどまでの低成長と賃金抑制がなかったなら、現在の抱える少子高齢化(出生、教育、医療、年金問題に直結)、未婚・晩婚化、家族の離散化などから生じる諸問題の解決は、これほどこじれなかったかもしれない。

わずか20年で日本そのものを変えた、かつての気骨ある日本人は、もう、いないようだ。

歴史が単なる年数の長さでないことを、彼らはその行動で証明した。

暗中模索しているに過ぎないと知りつつ、今、我々は、不安な社会におびえつつ何でもありで走り始めている。

財源がないから医療も教育も子育ても、何も出来ないということは、実は、子供から老人まで誰でも知っていることで、政治が堂々と弁解することではない。

たとえ金が十分でなくても、夢と希望さえあれば何でもできるはずである。

そのことは、かつての先人達が体験し、歴史や文化から容易に学ぶことができる。

「空白の20年」がどれほど計り知れない罪悪か、政治・経済・行政・学界を牛耳る、現代のエスタブリッシュメント(establishment)達は知る由もない。

最悪の悲劇を演じ続ける彼らに、我々の将来を委ねてはいけない！

それは自分のためではなく、未来の日本を担う子供や孫達のために、今を生きる我々の決断だと思っている。

参考：立澤芳男著「生活・社会総括レポート第10回」(財)ハイライフ研究所 2010.2.25  
<http://www.hilife.or.jp/report21/pdf/10.pdf>